

イエスのことば 第18回

イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。人間は羊よりはるかに価値があります。それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」
(マタイ 12 : 11~12)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 「承」の部に入っている。イエスが幾つもの出来事を通してメシアとしての権威を現わした時期である。
2. これまでに 10 の権威を見てきた。
 - (1) 病の癒しに関する権威。カナでの「遠距離かつ即時」の病の癒しであった。
 - (2) 教えに関する権威。ルカ 4 : 32 は記す、「人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである」
 - (3) 悪霊に対する権威。イエスが人に憑いていた悪霊を叱って、一言「この人から出て行け」と命じただけで、悪霊は出て行った。
 - (4) 病気に対する権威。シモン・ペテロの義母を慢性的な熱病から瞬時に解放した。
 - (5) 自然界に対する権威。昼間に網を下ろさせて大漁。ペテロたち 5 人の弟子がパートタイムの弟子からフルタイムの弟子へ。6 番目の弟子としてヤコブが加わる。
 - (6) 律法上の汚れに対する権威。ツァラアト患者の清めがなされた。ユダヤ議会が、イエスはメシアである可能性ありと見て、公式調査に入った。
 - (7) 罪の赦しにおける権威。中風の人に、神の立場から罪の赦しを宣言したうえで、病気を癒した。公式調査（観察・審問・判定）は観察段階から審問段階へ。
 - (8) 人に対する権威。取税人レビ（マタイ）を 7 番目の弟子として加え、レビの家でのもてなしを受けて、取税人仲間や遊女と一緒に宴会の席に着いた。調査団からの非難に対して、「わたしは罪人を招いて悔い改めさせるために来た」と言われた。
 - (9) 人の伝統に対する権威
 - ① 断食の伝統：調査団から断食の伝統に従わないことについて質問され、メシアが来ている今は喜ぶべき時であり、断食する時ではないと答えた。
 - ② 「言い伝え」の伝統：「古い衣・古い皮袋」のたとえ話を通して、イエスはそ

のような伝統とは関係しないと明言した。これは、パリサイ派が抱いていたメシア像＝メシアは「言い伝え」を完成してくださる、を覆すものであった。

(10) 安息日に対する権威

- ① ベテスダの池での癒し：紀元 28 年の春、過越の祭りのときに、イエスはエルサレムに上った。安息日に、イエスは、意図的に言い伝えを破って、中風患者を癒やした。エルサレムの指導者たちはイエスを非難したので、イエスはご自身の神性について語った。これにより、指導者たちの中で、イエスを排除しようとする動きが出始める。
- ② 麦の穂事件：安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたときのことである。弟子たちが空腹のために、麦の穂を摘んで口に含んだ。そば近くで監視している調査団は、それを見て、安息日に関する言い伝えに反するとしてイエスを非難した。このときイエスは、次の 3 点を答えた。
 - 第一に、安息日について教える前に、イエスは、言い伝えそのものの正統性を否定した。
 - ユダヤ教ラビたちは、言い伝えの正統性を主張するために、【書かれた律法とは別に、神がモーセに言い伝えを授けた。そしてその言い伝えは代々語り伝えられてきた】と教えていた。
 - そして、言い伝えの中に、「幕屋に供えるパンは、祭司以外は食べてはならない」という決まりがある。
 - しかし、サムエル記には、祭司がダビデと彼の従者たちに、供えのパンを与えたという記事がある。もし言い伝えがモーセの時から存在していたのなら、ダビデたちに供えのパンが与えられることはなかったはずである。
 - よって、言い伝えが、書かれた律法と同時にモーセに与えられたという主張は、偽りである。
 - 第二は、モーセの律法において、安息日に仕事が認められることがあることを論じた。
 - 祭司たちは神殿において安息日に仕事をして、罪とはならない。
 - 安息日においても必要とされる仕事、あるいは憐れみに基づく仕事（医療など）がある。
 - 第三に、安息日の本来の目的に照らして教えた。
 - ユダヤ教ラビたちは、イスラエル民族は安息日のために造られたと教え、安息日に関する 1500 もの言い伝えを作り、それをイスラエル民族に守れと教える。それはイスラエル民族を、安息日の奴隷にしている。
 - しかし、本来、安息日はイスラエル民族のために与えられたもので

ある。エジプトの奴隷から解放され、自由の民となったイスラエル民族のために、自由のしるしとして与えられたものである。

- イスラエルの王であるメシアもまた、安息日に仕えるのではない。メシアは、安息日の主である。メシアは、安息日に何をしてよいか、してはならないのかを決める権威を持っている。

3. 今回も、安息日に対する権威を現わした出来事である。安息日に関する出来事は、これで3連続、今回はその3番目である。
 - (1) 安息日にイエスが会堂で教えているときに、調査団（ユダヤ教指導者たち）は計画的に手の萎えた人をイエスの目の前に送り込んだ。イエスが安息日での言い伝えを破ってその人を癒やすのかどうか、もし癒やしたら安息日破りで訴えようとしたのである。
 - (2) イエスは、ユダヤ教指導者たちの意図を見抜いていた。イエスを陥れようとしている指導者たちの前で、手の萎えた人を癒やした。本日のイエスのことばは、そのときのことばである。
 - (3) この出来事により指導者たちとイエスの衝突は決定的となった。指導者たちは、イエスをどのようにして殺そうかと相談し始めた。
 - (4) 一方、イエスは、メシアとしての権威を現わし続けた。そして多くの弟子たちの中から、使徒として12人を選んだ。イエスの公生涯の「転」の部への準備である。

□本日のアウトライン

- A) 安息日について
- B) 右手の萎えた人の癒し（ルカ 6：6～10、マルコ 3：1～5、マタイ 12：9～13）
- C) 指導者層の動き（ルカ 6：11、マルコ 3：6、マタイ 12：14）
- D) イエスの動き
 - (1) 病の癒しに関する権威を現わす（マルコ 3：7～12、マタイ 12：15～21）
 - (2) 12人の使徒たちを選ぶ（ルカ 6：12～16、マルコ 3：13～19a）

A) 安息日について

(1) モーセの律法

出 20：8～10 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。

- ① 「いかなる仕事もしてはならない」と命令している。この命令の目的は、奴隷から解放され自由の民となったイスラエル民族に、そのしるしとして休みの日を与えることである。奴隷には休みはない。

- ② 「聖なるものとせよ」とは、他の日とは区別せよ、という意味。礼拝しなさい、ではない。安息日は、休む日である。
- ③ 安息日の精神は、奴隷から解放され、自由とされたことを喜ぶことである。
- (2) ユダヤ教パリサイ派
- ① モーセの律法、613の規定を、完全に守るにはどうしたらよいか
- 規定の優先順位を評価する
 - 社会的倫理的規定と儀式規定とに大別し、安息日はその両方にまたがる最も重要な規定と位置付ける
 - 613の規定ひとつひとつに、具体的細則を設けて、それを守るようにする
- ② その結果、安息日に関する細則だけで、1500もの細則を生み出した。
- ③ そして、安息日の重要性を強調して、次のように教えた。
- 安息日を守るなら、その他のすべての律法を守ったことになる。安息日を破るなら、その他のすべての律法を破ったことになる。
 - もしすべてのユダヤ人が、1日でも完全に安息日を守るなら、メシアが来る。

B) 右手の萎えた人の癒し (ルカ 6 : 6~10、マルコ 3 : 1~5、マタイ 12 : 9~13)

(1) 場面設定

- ① 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた (ルカ 6 : 6a)
- ② イエスは彼らの会堂に入られた。すると見よ、片手の萎えた人がいた (マタイ 12 : 9~10a)
- 「彼らの会堂」=ユダヤ教パリサイ派の影響力の下にある会堂
 - 「すると見よ」・・・パリサイ人たちが意図的に、片手の萎えた人を会堂に送り込んでいた。次の③で明らかになる。
- ③ そこに右手の萎えた人がいた。律法学者たちやパリサイ人たちは、イエスが安息日に癒しを行うかどうか、じっと見つめていた。イエスを訴える口実を見つけるためであった (ルカ 6 : 6b~7)
- パリサイ派の言い伝えでは、安息日に癒しを行うことは原則禁止。命に危険があるときのみ、癒してよい。右手の萎えた人の場合、命の危険はないので、安息日に癒やすのは、言い伝えを破ることになる。

(2) 調査団からの質問

そこで彼らはイエスに「安息日に癒やすのは律法にかなっていますか」と質問した。イエスを訴えるためであった (マタイ 12 : 10b)

(3) イエスの応答

- ① イエスは彼らの考えを知っておられた。それで、手の萎えた人に言われた。「立って、真ん中に出なさい。」その人は起き上がり、そこに立った。(ルカ 6 : 8)
- ② イエスは彼らに言われた。「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」(ルカ 6 : 9)
- ③ 彼らは黙っていた (マルコ 3 : 4)
 - ユダヤ教パリサイ派でも、安息日に善いことを行うことは認めていた。また、いのちを救うことも認めていた。命に危険がある場合は、安息日も治療行為を認めていたのである。
 - にもかかわらず、パリサイ派がメンバーとなっていた調査団の人々は、心を頑なにして、イエスの問いかけに沈黙して答えなかった。
- ④ イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。人間は羊よりはるかに価値があります。それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」(マタイ 12 : 11~12)
 - イエスはここで、当時の日常生活の中で、普通に見られる情景を引き合いに出す。羊が穴に落ちたなら、安息日でも引き上げて助け、群れに戻してやるのは当たり前であった。動物である羊のために善いことをするのが許されるなら、人間は羊よりもはるかに価値があるのだから、右手の萎えた人のために善いことをするのは、禁じられる筋合いではない。

(4) 癒し

- ① イエスは怒って彼らを見回し、その心の頑なさを嘆き悲しみながら (マルコ 3 : 5)
- ② そして彼ら全員を見回してから、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。(ルカ 6 : 10)
- ③ 彼が手を伸ばすと、手は元どおりになり、もう一方の手のように良くなった (マタイ 12 : 13b)

C) 指導者層の動き (ルカ 6 : 11、マルコ 3 : 6、マタイ 12 : 14)

- (1) 怒りに満ちた・・・彼らは怒りに満ち (ルカ 6 : 11)
- (2) 出て行って話し合いを始めた
 - ① パリサイ人たちは出て行って (マタイ 12 : 14)
 - ② イエスをどうするか、話し合いを始めた (ルカ 6 : 11)
 - ③ どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた (マタイ 12 : 14)

(3) ヘロデ党と組んだ

ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた（マルコ 3 : 6）

- ヘロデ党・・・パリサイ派とは対立関係にあった党派。ローマによる支配をよしとし、ヘロデ家がローマの下でユダヤを支配することを支持するグループ。聖書が預言するメシアの出現は、ローマに対する反乱になるとして反対する立場。

D) イエスの動き

(1) 病の癒しに関する権威を現わす（マルコ 3 : 7～12、マタイ 12 : 15～21）

① マルコ 3 : 7～8

- イエスは、弟子たちとともに、湖の方に退かれた。このとき、大勢の人々がついて来た。
- それらの人々は、国の内外から来ていた。
 - 国内（ガリラヤ、ユダヤ、エルサレム）
 - イドマヤ・・・ユダヤの南
 - ツロ、シドン・・・ガリラヤの北

② マルコ 3 : 9～10

- イエスは多くの人を癒やした。
- 病気に悩む人たちは、イエスにさわろうとして、押し寄せてきた。
- イエスは、群衆が押し寄せて来ないように、小舟に乗って移動した。

③ マルコ 3 : 11～12

- 汚れた霊たち（悪霊、墮天使）は、イエスの権威を認めた。
 - 悪霊に憑かれた人たちが、イエスを見るたびに御前にひれ伏した。
 - 悪霊は、その人の声帯を通して、「あなたは神の子です」と叫んだ。
- しかし、イエスは、悪霊による証言を認めなかった。悪霊が叫ぶたびに、黙るよう命じた。

④ マタイ 12 : 15～16 は、上記①～③の出来事を簡略に記している。そして 17 節から 21 節で、イザヤの預言（イザヤ 42 : 1～4）を引用し、その預言が成就したと記している。

(2) 12 人の使徒たちを選ぶ（ルカ 6 : 12～16、マルコ 3 : 13～19a）

- ① ルカ 6 : 12 イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。
- ② ルカ 6 : 13 夜が明けると弟子たちを呼び寄せ、その中から 12 人を選び、彼らに使徒という名をお与えになった。

③ 使徒職を設けた3つの理由 (マルコ 3 : 14~15)

- ご自分のそばに置くため
- 彼らを遣わして宣教をさせるため (宣教の内容は、イエスがメシア=王であること、メシアの王国が近づいていること)
- 悪霊を追い出す権威を持たせるため・・・この時点では、悪霊を追い出す権威は使徒のみに与えられた。後日、他の弟子たちにも拡大される。
 - 72人【70人】(ルカ 10 章)、「信じる人々」に (マルコ 16 : 17)

④ 使徒たちのリスト (1番、5番、9番は、3グループのリーダー)

| マタ 10 : 2~4 | マコ 3 : 16~19 | ルカ 6 : 14~16 | 使徒 1 : 13 |
|------------------------|-------------------|-------------------|-----------------|
| 1. シモン (別名ペテロ) | シモン (別名ペテロ) | シモン (別名ペテロ) | ペテロ |
| 2. アンデレ (ペテロの兄弟) | ヤコブ (ゼベダイの子) | アンデレ (ペテロの兄弟) | ヨハネ |
| 3. ヤコブ (ゼベダイの子) | ヨハネ (ヤコブの兄弟) | ヤコブ | ヤコブ |
| 4. ヨハネ (ヤコブの兄弟) | アンデレ | ヨハネ | アンデレ |
| 5. ピリポ | ピリポ | ピリポ | ピリポ |
| 6. タルマイの子 【ナタナエル】注1 | タルマイの子 【ナタナエル】 | タルマイの子 【ナタナエル】 | トマス |
| 7. トマス | マタイ | マタイ | タルマイの子 |
| 8. 取税人マタイ | トマス | トマス | マタイ |
| 9. ヤコブ (アルパヨの子) | ヤコブ (アルパヨの子) | ヤコブ (アルパヨの子) | ヤコブ (アルパヨの子) |
| 10. タダイ 注2 | タダイ | 熱心党员シモン | 熱心党员シモン |
| 11. 熱心党シモン | 熱心党シモン | ヤコブのユダ | ヤコブのユダ |
| 12. イスカリオテの ユダ | イスカリオテの ユダ | イスカリオテの ユダ | |

注1 「バルトロマイ」と訳されているが、アラム語で、その意味は「タルマイの子」

注2 タダイは、アルパヨの子ヤコブの兄弟。本名ユダ。タダイは本人の別名か、父の別名。タダイを父の別名とすると、ユダは、「アルパヨ、別名タダイ」の子となる。このユダを、「タダイ」と呼んだのは、イスカリオテのユダと区別するためであったろう。